

伊奈郡記ニ鹿鹽ト云、古來ノ名所ニテ、山中ヨリ出水ヲ鹽川ト名ケ、山中ニ海潮アリ、里人汲テ食鹽トストアリ、水脈此ニ相通ズルナルベシ、鹽井方五尺、里人汲其水煮レバ即鹽トナル、色皎白ナリ、本草綱目云、鹽井者、今歸州及四川諸郡皆有、汲其水以煎作鹽、如煮海法、蜀都賦曰、濱以鹽池、又云、家有鹽泉之井ト、此類ナルベシ、自是南早川ニ沿タル諸村、湯島ニ温泉アリ、大原野ニ鹽島云處アリ、草鹽村、鹽上村、又鹽澤ナド云地名モアリ、鹽氣多キ處ナランカ、東河内領田原村、文左衛門云者ノ宅地ニ、鹽井ト稱スル者アリ、鹹味差薄シ、凡鹽ニ五種アリ、海鹽、井鹽、池鹽、畦鹽、鹹鹽、是ナリ、略中舊以物爲名處、古人必有所見而呼之コトナリト云、試之ニ本州鹽山ニ鹹鹽ヲ生ズルコトハ、州人モ能言之、又傍ラニ鹽川ト云モアリ、市川平鹽丘ニモ生之トナリ、府中北ニ鹽部云アリ、今城郭ニ接スル地ニシテ、舊構ハ詳ナラチドモ、堺町裏外溝ノ水鹹ケレバ、聊其コトヲ徵スベシ、

〔鷹山公偉蹟錄^四〕小野川鹽燒ノ事

小野川村ニテ鹽燒出シタル根元ハ、代官今成平兵衛ガ見立、申出タルヨリ御世話アリ、仙臺ヨリ其製ニ工ナル者ヲ召寄せ、傳授セシメラレシカバ、一村遂ニ其利ヲ得タリ、公[○]上杉治憲 其場へ入セラレ、上覽マシク、勵マシ玉フ、蓋シ海ナキ國ヨリ山鹽ノイヅルハ、非常ノ御備ヘニモナルベキヲ以テナリ、律脩篇

〔一話一言^{十一}〕一奥州會津領の内に大鹽村といふ所あり、山間の川傍に爺が井、姥が井といふ二ツの井あり、其井水を沙にそぎ、燒て鹽となす、其鹽色潔白にして軽く味よし、二井爺が井はやや淡く、姥が井は濃なり、長左衛門といふ百姓其井の主たり、其家の祖のために、僧空海呪書てあたふといふ、今に空海の像と並爺姥の二像あり、これ王右軍帖といへる蜀の鹽井也、大鹽村を上れば、ひばら澤といふ所に出といふ、

〔地方凡例錄^二〕鹽濱之事[○]中